

幼稚園の安心・安全について

学校法人永吉学園

(田上幼稚園・田上キッズ保育園)

理事長 永吉 龍志

安心・安全を守ることは、どのような企業にとっても大切であり、対処を誤ると組織存続の危機を招きます。本号では、安心・安全な幼稚園の環境づくりに取り組んでいる学校法人永吉学園(田上幼稚園・田上キッズ保育園)の永吉龍志理事長に寄稿いただきました。



はじめに

私共の幼稚園では、心身ともにたくましい人間の育成を目指して、幼児教育に取り組んでいます。本園では、安心・安全な幼稚園の環境づくりとして、物的(施設)環境・人的環境・財政的環境をそれぞれ整えていくことが、園児を守り、将来の国を担う人材を育成する場を提供できるものであると考えています。

幼稚園では、まず第一に物的環境(施設)を整え、安心・安全な事故の起きない環境をつくること。第二に人的環境として、幼児教育に携わる職員が目の行き届いた教育環境をつくり守ること。第三に、これらを経営していくための財政的基盤を確立させることを常に考え行動し、最適な環境を整えていかなければなりません。

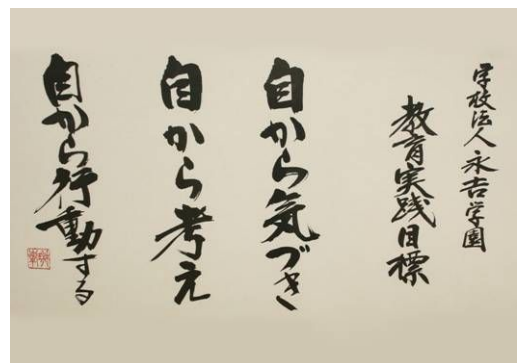
また、近年幼稚園教育の中で、食育の重要性が叫ばれており、食の安全が大変重要な問題となっており、今後の重要課題として取り上げられています。本園でも、安全な食材の導入や、調理に対する基準の厳密化などに対応しており、子どもの食の安全・安心を守っているところです。

本園での、安心・安全対策として「環境」と「食育」の観点から、どのように取り組んでいるかを紹介いたします。

1. 田上幼稚園の概要

田上幼稚園は、昭和51年4月に鹿児島県の代名詞、桜島を望む現在地にトリコロールカラーのトンがり帽子をシンボルとして、「21世紀を担う世界に羽ばたく子どもたち」をスローガンに、音楽・体力づくりなどの情操教育を目指して開園しました。

また、他に先駆け、長年計画してきた「インターナショナルスクール田上幼稚園」を2005年10月に開設し、日常の保育を英語で、外国人講師のイメージ



教育による英語教育を行っています。

とんがり帽子の屋根を持つ園舎は、開園以来のシンボルで、各教室に冷暖房設備を設置し、また全国でも類を見ない冷房付きの体育館を備え、暑い夏の日、寒い冬の日、桜島の降灰の日、雨の日も元氣いっぱい遊ぶことができ、運動会の練習やサッカー、そして、子どもたちだけでなくお母さんたちのバレーボール等、地域の方々にも利用されています。

本園は、鹿児島市中心部の閑静な住宅地に囲まれ、高台にあるため鹿児島市街地を一望できる環境にあります。また、園庭には、桜・梅・楓・栗・紅葉などの木々が植えられ、子どもたちが四季を感じられるように環境を整えています。

2. 安心・安全な「環境」づくり

幼児教育を取り巻く、わが国の国際経済社会全体の趨勢をとらえてみれば、現在共働き世帯が就業世帯の半数を超え、子どもの多くは、両親が家庭にいる時間が少なくなり、また地域社会の連帯感も希薄になってきております。このような中で、今改めて幼児教育を問い直さねばならないのは、従来からの幼児教育はもとより、これまで以上に子どもと幼稚園との関わり、子どもを取り巻く「環境」に目を向けなければならないということです。

「環境を通しての教育と援助の在り方」のもとに、幼児の自発を促し、自ら活動し学ぶための環境構成の在り方や、保育者の幼児への関わりと援助のあり方について考えています。

幼稚園教育は、幼児期の発達特性に照らして、幼児の自発的な活動としての“あそび”を重要視し、心を動かされる環境、時間や場所、共に活動したり共感し合ったりできる人の存在や、子どもが自ら行動できるきっかけづくりなどができるように教育課程を編成し、教員の援助によって適切な施設設備の下に適切な環境を与えて、その心身の発達を助長し、組織的・計画的な指導を、環境を通して行うことが重要なこととなります。現在、幼稚園内で考えられる「環境」に、自然環境、地域的環境、人的環境、物的環境、空間的環境等あらゆる環境に対しての具体的な内容を調査研究した結果を適切に活動を行うことで、「環境」の安心・安全対策を行えます。幼稚園内にある様々な「環境」の一部を紹介いたします。

(1) ゆとりある園庭の遊具

田上幼稚園の園庭には、沢山の遊具は置いてありません。遊びの中で物的環境だけに頼るのではなく、自分達で遊びを発展させていけるよう教師は手助けして気づかせていきます。ブランコも使用する時は「先生、つけて下さい」「ありがとう」の言葉、幼児の自己主張や気持ちを言葉で伝えられるようにしています。



幼稚園の園庭

(2) 遊具・設備の講習会

年に数回、園長先生による音響器具の取り扱い、スピーカーやコード等の配線の仕方などの講習会を行っています。全ての音響セットを出し、職員が指導を受け共通理解を図っています。



講習会の様子

(3) 管理されている楽器類

鼓隊の太鼓です。子ども達が自分で取り出し、片付けが出来る様に整理しています。また、職員全員で年に5回ほど1つ1つ太鼓のネジが緩んでないか、皮が破けてないかチェックします。より良い音が出るようチェックは怠りません。



太鼓

(4) あらゆる環境に対応した体育館

大きな体育館には冷暖房が完備され、鹿児島特有の灰、雨が降っても気にせずのびのびと遊ぶことができます。



体育館

(5) 紫外線予防テント付きのプール

水遊びで使用しているプール。年齢に応じて水量を調整します。紫外線予防のテントが設置されており、火山灰が降っても気にせず楽しむことができます。



テント付きプール

(6) 還元水、強酸性水

水のPhの値によって、飲み水や消毒液など、色々な用途があります。この還元水は様々な場面で使われており、口に入れても安全で、具体的にはすり傷の消毒や汚物等の処理を行う時、殺菌に使用しています。



還元水、強酸性水

幼稚園の研究テーマでもある『環境を通しての教育』は、幼児がしたい、やりたいことを直接与えることではなく、間接的にかかわっていくことが重要であることを本園でも実感しています。

幼児が自ら気づいて、自ら行動することのできる環境構成や、教師らの言葉かけが間接的にかかわっていくこととなります。そのような環境を構成していくことが幼児の自発心を高め、より活動を深めることになり、幼児自身の自ら生きる力・自ら考える力へとつながっていく効果的な教育・指導であると考えます。

しかし、ただ設備環境を充実させるだけでは、幼児は、自ら活動を展開していくことは難しい。教師は、見守り続け、幼児の自発的行動を待つのではなく、幼児一人ひとりへの言葉かけ等、教師の気づいたことを物的環境に取り入れ、教師自ら行動して幼児に見せることで幼児の新たな活動を導き出していくことが大切だと思います。

このような、物的環境・人的環境の中で、指導する側の教師の影響が、展開の広がりや知識の獲得、集団生活の規律、幼児同士のかかわりなど、幼児の思いやり、自信・集団意識が芽生えています。と同時に、このような様々な「環境」を整えていくことが、幼児教育における安心、安全につながっていくものと思われれます。

3. 安心、安全な「食育」とは

田上幼稚園(キッズ保育園)では、「食育」の観点から、食の安心・安全に、信頼できる業者の協力のもと、出来ることから少しずつ取り組んでいます。

食品には、添加物や農薬が目には見えない形で健康を脅かしています。こうした状況の中、食育を実践するという意味でも、なるべく自然に近い調味料・食材を入手し、使用するよう心掛けています。

昨年は、宮崎県の牛や豚の口蹄疫が大きな問題となり、今年3月11日の東日本関東大震災により、福島原発の放射能漏れの影響で食の安全性が問題となり、子どもたちの食の安心・安全が学校教育の「食育」として、大事な課題となっています。学校の評価も食の安全について大きく取り上げるようになってきています。なお、田上幼稚園では平成16年から文部科学省のモデル幼稚園として研究を続けてきています。

日々260食の給食を作る中、時間的制約をはじめ様々な制約、予算もあります。しかしこれを前提条件として、日々子どもたちの笑顔に会いたくて、この笑顔が未来にまで続いていくことを願って、どのように取り組んでいるかを一部紹介いたします。

(1) 食育の3本柱

① 太く長く生きるための「選食力」

選食力とは、幼い子供からお年寄りまで、それぞれ自分に適した安全・安心・健康になる食材を選ぶ能力のことです。

旬の食材は、栄養価が高く、人がその季節に必要な栄養素をキチンと補給できます。その美味しさも格別です。季節を感じる彩り豊かな食卓を囲めば、五感で味わう心の豊かさが育まれます。

お手軽にコンビニ・ファーストフード等で食べものが手に入る世の中だからこそ選食力が不可欠です。本物の味を知り、安全性を見抜き、自分を健康にしてくれる食べ物を選んで、バランス良くいただくことが肝心です。そのためには、幼いうちに正しい食生活、生活習慣、しつけを身につける必要があります。



給食の風景

② 幼少の食事作法

「いただく」。人は他の動物の命をいただくことで、その命と引き替えに生きています。この命に感謝を込めていただく。感謝を込めて「いただきます」を言う。こうした事をキッチンと伝えていく。現状では、こうした事を語りかけてくれる年長者が家庭や地域になかなかいないのが残念ですが、みんなで伝えていく必要があります。



給食の風景

③ 地球規模 グローバルな観点で食を考える

現状で日本の食糧自給率は40%、40年前は73%、33%も低下しています。日本で自給できない60%は外国からの輸入でまかっています。日本の食糧は、国内で生産したものと合わせて6700万トンあるといわれています。しかし、それにも関わらず今は飽食の時代と言われています。また現実的な部分では食品の廃棄や食べ残しは激しく増加し、ついには残飯が2300万トン、一人当たりで171キロにもなります。金額に換算すると11兆円ともいわれます。これが実情です。なんてもったいないことでしょう。「もったいない」この言葉は2004年ノーベル平和賞を受賞したケニアのワンガリマータイさんによって環境保全の世界共通キーワードとして全世界に発信されました。



もちつきの風景

こうしたことで日本語が世界で使われるのは悲しい事ですが、「MOTTAINAI」もまた食育のひとつの考えるべき要素です。「旬の食材」・「安心安全な食材」・「健康に良い食材」を食選力をもって見定め、命あるひとつひとつの食材に感謝の心を込めていただきたいものです。飽食の時代にあっても「MOTTAINAI」という世界規模の観点からも万物万人に感謝の心を込めて、「楽しく」・「正しく」・「美しく」・「食べる」・「感じる」・「考える」・「行動する」ことが食育です。

4. 幼稚園の「食育」の取組み

幼稚園、保育園における食育は、給食を通じて子どもたち、保護者、先生、給食室の職員、業者、生産者、みんなで学びあい、食べることで、絆を深めていく機会にしていく事だと思えます。

給食と家庭の食事は、バランス良く関わることで、その成果が一生にわたり、あらわれてくるものだと思います。また、食品添加物・農薬など、本来自然界には無い化学物質が、子ども自身の体をそして大人の体を介して子どもの体に悪影響を及ぼしている問題点も、今後無視できません。

「健全な肉体に健全な精神が宿る」、最近では聞かれなくなった言葉ですが、近年子どもの運動能力は年々低下する一方で、食物アレルギーやアトピー皮膚炎の子どもたちは増加の一途です。我慢のきかないキレやすい子どもの増加、子どもが関係する犯罪の増加など心の異変も心配です。この背景には、慢性的な朝食の欠食、お菓子・ジュースの過剰摂取による低血糖症、生活リズムの乱れなど、子どもたちを取り巻く環境の乱れに様々な問題があるのは、もはや疑いようがありません。

食べ物があふれ、忙しい毎日では、何をどう食べるかでは無く、なにでお腹を満たそうという考えになりがちです。また、親が自分の生活リズムを優先することで、子どもが犠牲になっているケースも少なくありません。この状況を改善するには、個人の努力とみんなの協力、どちらも大切です。今後は、忙しい中でも前向きに食育に取り組みたい保護者の方々と一緒に、給食の試食会や家庭でシンプルに作れる料理教室なども、各方面の方々のご協力を頂きながら、催したいと思っております。様々な場面でみんなと一緒に学びあい、子どもたちの為にもみんなで協力して食育に取り組もうとしています。

(1) 食育の取り組みのメリット

① 食べることで、幼児期に身に付くこと

- ・みんなと一緒に食事する楽しさを知る
- ・正しい食事マナーが身に付く
- ・うすあじの味付けで、体に負担をかけずに味覚が定着する。
- ・命の存在を知り、食べ物への感謝の心が育まれる

② 給食で幼児期に身に付くこと

- ・みんなと一緒に食事する楽しさを知る
- ・規則正しい食生活習慣が身に付く
- ・身体と心に良い食材を自然に取り入れられる
- ・作り手の思いやりと愛情を自然に感じることができる

③ 自園で作る給食の良さ

- ・冷たいものは冷たく、温かいものは温かく食べられる
- ・みんな同じ献立で、たのしく食べて好き嫌いが改善される
- ・旬の食材、安心安全な食材、添加物など極力少ないものを使用できる
- ・季節や行事など、様々な状況の変化に対応できる

(2) 食育における、食材のこだわり

一言に安心安全な食材と言っても、今こうした食材に巡り合えることは、そのこと自体なかなか難しく貴重なことです。日本は急激な経済発展と共に食料の需要も拡大し、それを補って余りある食料を日本独自の技術力や外国からの輸入でまかない、今では年間220万トンもの食料を廃棄するまでの国になってしまいました。しかし、こうした大量の食品を製造する課程で、近年問題になっている添加物や農薬を様々な場面で使ってきたことが、今多くの人の健康を奪ったり、脅かすようになりました。便利さと引き替えに大きなリスクを背負わされたわけです。とは言え、全ての食材を100%安全なものに揃えることは、時間的にも経済的にも何より物理的にも無理があります。そこで、これからは現状で出来ることから子どもたちの為になるべく自然に近い食材を取り入れたいという優しい気持ちと同時に、健康に対する危機感の両方の気持ちを持って食材にこだわっていきたいと思っています。

(3) 食育の実践

食育といえば、栄養や食品の理解がメインですが、しかし食育とはそれだけではありません。食育で学べることの中には、幼児教育と密接にかかわる事が多くあります。食べることはもちろん、人との関わり、自然との関わり、料理を作ることとの関わり、いろんな食文化との出会いなど、園生活の中で数多く食育を通して実践できる要素が含まれています。こうした数多くの要素が、子どもの今と未来を健康で生き生きと生活して、たくましく育っていく基本的な生きる力を身につけることに繋がっていきます。

食育の今後の展開は、これまでに実践されてきた、愛情弁当の日や園外での農作物の収穫など、園全体として家庭や地域と連携しながら、さらに食育を拡大していくことが大事な要素になってくるものと思われます。

最後に、今回ご紹介しました「環境」や「食育」だけではなく、幼児教育に関わる全ての安心、安全な取り組みを継続して行っていくことが、21世紀を担う信頼できる幼稚園・保育園教育内容の充実につながり、幼児教育業界や社会全体に貢献していくことであると考えています。



次代を担う子供達

活性化情報 中小企業 がごしま

2011
第674号

8

特集
テーマ

- 中小企業白書の概要2011
- 中小企業白書事例集
- 九州新幹線全線開通 ～鹿児島から元気を発信～



Kagoshima
Prefectural Federation
of Small Business
Associations

鹿児島県中小企業団体中央会